

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2020

課題番号：16K02126

研究課題名（和文）意志と自由の系譜学 I

研究課題名（英文）Genealogy of Free Will I

研究代表者

大西 克智 (ONISHI, Yoshitomo)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号：60733996

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、研究代表者が先立って構築した、意志と自由に関する西洋古代から近世にわたる系譜学（『意志と自由 一つの系譜学』知泉書館、2014年）を、深化・発展させるために必要な基盤を構築するための作業を遂行した。具体的には、（1）西洋中世から近世における神学と哲学の関係を明らかにすること、（2）自己意識と良心の関係を解きほぐすこと、（3）これらの底辺にある精神史の流れをダイレクトに反映しているミシェル・ド・モンテーニュ（1533-1592年）の主著『エッセー』を分析すること、以上である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で取り上げた、西洋中世から近世における神学と哲学の関係、自己意識と良心の関係、そしてミシェル・ド・モンテーニュの『エッセー』は、いずれも、まず学術レベルにおいて、死角の位置に置かれていたテーマであり、本研究にはそれらに新たな光を投げかけるという意義がある。また、とりわけ自己意識と良心の関係は、人間の倫理の根幹をなすものであり、それを解きほぐすことには学術界を超える社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）： Through this research, efforts has been paid for deepening and developing the genealogy of free will ("Will and Freedom", Chisen-Shokan, 2014), which the principle researcher had try to establish previously. In particular, (1) studying a relation between theology and philosophy from Middle Age to 17th century; (2) exploring the origin of conscience and self-consciousness; (3) analyzing "Les Essais" of Michel de Montaigne (1533-1592), which reflects directly a hidden movement of the history of philosophy.

研究分野：西洋近世哲学

キーワード：意志 良心 自己意識 自由 デカルト モンテーニュ

1. 研究開始当初の背景

古来、西洋哲学においては、無数の神学者や哲学者たちが人間の自由とはなにか、自由意志とはなにかという問題に取り組んできた。しかるに、彼らがそれぞれ構想し、展開して自由意志論についての研究は膨大な数に上るいっぽうで、自由意志をめぐる思考の動きそのものが変容してゆく過程を把握しようとする研究は、ほとんどなされてこなかった。その背後には、「意志」と「自由」が、いわゆる概念の枠では捉え尽くしがたい、人間の生存感覚に根差すゆえに、コンセプチュアルな思考とプリミティブな想念とは複雑に絡まり合っているという事情があるものと考えられる。

このような状況のもとで、本研究代表者は、西洋哲学における自由意志概念の系譜を古代から近世まで辿った自著『意志と自由 一つの系譜学 アウグスティヌス～モリナ&スアレス～デカルト』(知泉書館、2014年)を公表した。その内容をより精緻化し、発展させることを、本研究は申請時の主要な動機とした。

2. 研究の目的

当初の目的は、上記著作で十分に扱うことのできなかった、オッカムのウィリアム(1285-1347)、M. ルター(1483-1548)、G. W. ライプニッツ(1646-1716)の意志および自由概念を検討し、自由意志論の系譜学をE. カント(1724-1804)以降、ドイツ観念論哲学へ延長する橋頭堡を確保する点にあった。

しかし、オッカムとルターを研究する過程で、西洋中世と近世・近代との端境期にあたる十六世紀の思想状況を徹底的に調べる必要があることが明らかになった。そこで、ルターによる宗教改革を受けて展開された宗教戦争と、古代ギリシャ哲学に混乱した時代の突破口を求めた十六世紀ルネサンスの知的動向とを背景にしなが、こうした時代の思潮に流されることなく独自の思想を展開したシェル・ド・モンテーニュ(1533-1592)の主著『エッセー』を分析することに、研究の力点をシフトすることになった。

とはいえ、自由と意志をめぐる思想の系譜を掘り起こすという基本線を変更したということではない。むしろ、意志の自由という問題の背景には、人間の「自己意識」、「良心」、さらには「自己」、「私」、「自分」、そして「生きることの意味」という、きわめてプリミティブな観念の生成が関わっていることを、モンテーニュの思想を通じて明らかにし、自由意志という問題の裾野の広さを明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

本研究は、「系譜学」を主導的な方法とする。哲学史研究においては、哲学者相互の影響関係や、概念の異同がテキストに即して問題にされる。これに加えて、「系譜学」では、テキストの背後で作用している思考の力学、つまり出来上がった概念の内容ではなく、概念を生み出すさいにはたらいっている思考のモードを浮き彫りにすることで、哲学史の深層を探ることを目指すための方法である。じっさい上は一次資料を丁寧に読み解いてゆくということになるが、そのさい、書き手が当然の前提としている事柄(書き手にとってのプリミティブなもの)を把握するよう特に注意することになる。

4. 研究成果

本研究の最終的な成果は大きく次の三点にまとめることができる。

(1) モンテーニュ(1533-1592)の主著『エッセー』を徹底的に分析し、これを内容上の一貫性とは無縁な著作と見なす従来の通念を覆すに至ったこと。すなわち、ギリシャ文明圏とキリスト教文化圏を貫く一本の筋がモンテーニュの思索を貫いており、ソクラテスに遡る哲学の歴史と、ルターによる宗教改革を経てふたつの流れとなったキリスト教神学の歴史の交錯する地点に彼が立っていることを明らかにした。そして、モンテーニュがエピクロス主義や懐疑主義の立場に立つことも従来の常識であったが、これらも解釈上の虚像にすぎず、あらゆる特定の「主義」を排除して、思考の自律性を確保しようとする点にこそモンテーニュの真骨頂があることを明らかにした。さらには、思考の自律性を守ろうとするモンテーニュの知的営為が、後世「実存」と呼ばれる人間の赤裸なありようを先取りするものであることも明らかにした。

(2) 第二に、モンテーニュの精神の基底で働く「意志」、「意図」、「意識」の関係を明らかにする作業を遂行することで、当初の計画とは異なる仕方ではあるが、「意志と自由の系譜学 I」に一つの区切りをつけるに至ったこと。すなわち、「自己」を形成する「意識」と「良心」の關係に着目することで、本研究の系譜学構想を、新たに開始する基盤研究(C)「意識」概念の形成をめぐる系譜学的研究(課題研究番号 21K00034、令和3~7年)に接続することができた。

(3) 上記の研究のなかで、神学と哲学の關係という哲学・思想史上の宿痾ともいえる問題に新たな光を投げかけたこと。すなわち、神学と哲学の關係の変容を、アウグスティヌス(354-430)、アンセルムス(1033-1109)、オッカム、ルター、F. スアレス(1548-1617)そしてR. デカルト(1596-1650)に至る「信じる」と「知る」との關係の変容過程として浮かび上がら

せることができた。

以上の三点((2)では、「意識」と「良心」の関係に関する考察)は、いずれも、従来の哲学・哲学史研究において死角の位置に置かれていた問題に焦点を当てるものであり、それぞれについて、さらなる展開の道筋を示し得たことで、哲学・哲学史研究全体の今後の進展において、大きな意味をもつものと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大西克智	4. 巻 56輯
2. 論文標題 conscientiaの系譜	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学論文集	6. 最初と最後の頁 57-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/4416575	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西克智	4. 巻 22号
2. 論文標題 自知について モンテーニュにおける思弁と現実	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 フランス哲学・思想研究	6. 最初と最後の頁 2-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西克智	4. 巻 2号
2. 論文標題 良心の呵責と自己意識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ひとおもしろい哲学を創造する年間誌	6. 最初と最後の頁 69-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大西克智
2. 発表標題 試論：「意識」の誕生をめぐる
3. 学会等名 九州大学哲学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大西克智
2. 発表標題 受動・意味・情念 デカルト『情念論』再考
3. 学会等名 東洋大学国際哲学研究センター主催連続研究会（2018年2月17日）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大西克智
2. 発表標題 「対話」について - モンテーニュの遺産
3. 学会等名 NPO法人日本論文研究センターGlobe主催講演会（2018年5月12日）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大西克智
2. 発表標題 思考と現実 ソクラテス・百姓・モンテーニュ
3. 学会等名 日仏哲学会秋季大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 大西克智（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ちくま書房	5. 総ページ数 330（大西担当151-181）
3. 書名 世界哲学史5（第6章「西洋における神学と哲学」担当）	

1. 著者名 (共著) 木田・渡辺編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 704 (大西担当577-612)
3. 書名 哲学すること 松永澄夫への異議と答弁 (大西担当: 第13の異議「倫理の行方ー「よき生」への希いをめぐる」)	

1. 著者名 大西克智 (単著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 -
3. 書名 『エッセー』読解入門ーモンテニユと西洋の精神史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------